

然るにリガントは優秀なる研究結果を公にして  
下の如く論じて居る。レーメルの實驗結果は、よ  
く慣れて居る容易の精神的仕事については、行は  
れることであるが、骨の折れる、むづかしい仕事  
のためには、睡眠時間を短くすることは、如何な  
る人にとつても有害なことであつて、前日の疲れ  
を回復して仕事能力を著しく高めるためには、長

時間の睡眠が必要である。五時間や六時間の睡眠  
では仲々仕事能力の回復が出来るものではない。  
それ以上、一時間や二時間眠つても、まだ仕事能  
力が高まる點までには行かないのに徹しても明ら  
かである。換言すれば、困難なる仕事能力をする  
場合には睡眠の回復作用はその時間と正比するも  
のである。

『トム・ソーヤ』(三)

|| 英文學に現はれたる子供(十八) ||

岡 田 み つ

まんぞくな男兒であれば、その少年期の中に、  
必らず、何處へか行つて隠してある寶を探し出し  
たいとの念に驅られる時があるものである。此願  
ひが、或日忽然としてトムの心に起つた。で、友  
達のジョー・バーバーを探しにと飛び出して見た  
が不成功に了つたので、次にベン・ロジャースを尋

ねたところが、彼は魚釣に行つて留守であつた。  
その中に、トムはフエン・ハックにはたと行き逢  
つた。ハックならば丁度宜ささうだと思つて、ト  
ムは彼を人氣のない處に連れて行つて、事の譯を  
親しく打明けた。ハックは、一も二もなく賛成し  
た。面白くて資本のかからぬ仕事ならば、ハック

はいつでも二つ返事で請合ふのである。彼は、「金でない」時といふものを困る程に所持して居たからである。ハツクは早速に問ふた。

「何處を掘ろうね。」

「大概何處でも構はぬのだ。」

「さうか。そこら中に隠してあるのか。」

「否。そうではない！ 特別の場所に隠してあるのさ。鳥の中とか、時には古い枯樹の枝の端の真下でね、||夜中にその枝の影が落ちる丁度下に、朽つた函に入れて秘めてあるとかさ||だが大概は化物の出る家の床の下にあるものなのだよ。」

「誰が隠すのだい。」

「それは無論盜賊さ||君は誰が隠すと思ふのさ—

まさか學校の先生でもあるまい。」

「どうだか知らない。己だつたら、隠したりしないで、さつさと費消つて遊んでしまふがな。」

「僕だつて。だが、盜賊はさうしないんで、きつ

と其を隠して置くのだよ。」

「後で取りに来ないのかね。」

「取りに来る積りなのだが、場所の目標を忘れるとか、死んでしまふとかするのだ。兎に角、寶が長い間そのまゝに成つて錆が出る程になるとその内に誰かが、古く黄色くなつた紙片を見付けけるのだ。すると、其紙片に目標の見付け方が書いてあるんだが、記號だの象形文字で書いてあるので、一週間位掛からなくては其が讀めないのさ。」

「しやうけ—何だつて？」

「象形文字ツて—それ畫や何かで、何の事だからつとも知らないあれさ。」

「その書付を御前持つて居るのかい。」

「否。」

「其ならどうして、その目標が分るのだい。」

「僕のは目標は不用いのだ。泥棒は、化物屋敷か、島か、一本枝の突き出てゐる枯樹の下かに、寶

を埋めると定まつて居るから。ジャクソン島は少し掘つて見た事もあるが、其内もう一度やつて見ても宜いし、ステル、ハウス、グランチの方には古い化物屋敷があるし、枯枝の附いてゐる木はいくらもあるからね。」

「どの下にも皆入つて居るのか。」

「何を言ふんだ。まさか。」

「そんなら、どの木の下ツていふ事が、如何して解るのさ。」

「一つく皆試して見るのだ。」

「では夏中かゝつてしまふ。」

「掛かつたつて宜いではないか。真鍮の壺の中に、鏝まがひだらけになつて百弗ひゃくぶ入つてゐるのを見付け出すとか、朽ちた函の中に、ダイヤモンドが一杯入つて居たら如何する。」

「それは豪義だらうな。すいぶん有難い事だらう。したら、己れには百弗御呉れね。ダイヤモンドは不用ない。」

「よし承知だ。併し僕はダイヤモンドを捨てるやうな事はしない。一個で二十弗位するものもあるものね。」

「そうか。ほんとに?」

「そうとも。誰だつて其位の事知つてゐる。君、見た事はないのか。」

「どうも覚えがないな。」

「王様なんかウンと持つて居るせ。」

「おれは王様に知り合ひがない。」

「それはそうだらう。歐州へ行くと、大勢跳ねまはつて居るよ。」

「跳ねて居るかい?」

「跳ねるツて! まさか。」

「では、御まへ、何て云つたのだい。」

「エー焦心あせりつたい! 唯、大勢居るツていふ事さ。」

「跳ねてやしないよ。跳ねて居る譯がないではないか。唯何となくそこら中に一面に居るといふ事さ。あの駝背へらのリチャード王のやうなのが。」

「リチャードー！ 姓は何といふのだ。」

「姓なんか無いのだ。王様は呼名しかないのだ。」

「そうかい。」

「あゝ、ないんだよ。」

「それでよいと言ふなら先方の勝手だが、己れは王になつて、呼名ばかりしかないなんて厭だ  
な……黒ン奴のやうなもの……其はそうと最初  
に何處を握るンだい。」

「さ。僕も知らないが、ステル、ハウス・プランチ  
の先の丘の上にある枯枝の樹の處でもやろう  
か。」

「よし承知だ。」

二人は役に立たぬ鶴嘴と鏟とを探し出して、三哩  
の遠い處をテク〜徒歩いた。到着した時には  
息が切れて、暑くて堪らないので、楡の木の樹蔭  
にごろりとなつて、一休みやり出した。トムが、

「中々いゝね。」といふと、

「全くだ。」とハツクが答へる。

「もし此處から寶が出たら、君は自分の取分をど  
うする氣だへ。」

「毎日バイを買つて而してソーダ水を飲むんだ。

それから曲馬の見世物が来るたんびに、見に行

つて……面白いなあ。」

「ちつとも貯へないのかい。」

「貯へる？ 何だつて。」

「先へよつて暮せるやうにさ。」

「駄目だ！ 親父がいつか又戻つて来るもの、急  
いで費消つてしまはなければ皆引さらつて持つ  
て行くに定まつてら……御前はとうする氣だ、」

「大鼓の新しいのと、上等の劔と、赤のネツクタイ  
と、犬の子とを買つて、それから結婚するんだ。」

「結婚する？」

「そうさ。」

「トム！ 御前氣が違つたな。」

「まあ見て居たまへ。」

「これ程馬鹿な事があるものか。己れの親父と御

母あを見ろ。喧嘩ッたら年中絶間なしだッた。

それはよく覺えてゐる。」

「そんな事は何でもない！ 僕の結婚する娘は喧嘩なんかしない。」

「いや皆同じだよ。皆一ツ組だ。だから、もつとよく考へて御覽。ほんとに。その娘の名は何といふのだ。」

「いつか教へてやる。今はいけない。」

「そうか、それでもいいや。唯御前が結婚するとおれは一層淋しくなるなあ。」

「なあに、僕の家へ來て住めばよい。さあ、そろそろ動き出して、掘りに掛ろうよ。」

二人は、三十分位せつくと大汗あせになつて稼いだ。が、何も出なかつた。又三十分働いた。やはり何も出なかつた。ハックが、

「こんなにも深く埋めるかなあ。」

「時にはさういふ事もあるが、きつと、いふ事はない。大概はさうではないのだ。どうも場所が

違ふらしい。」

と言つて又別の所を選んでやり直した。少しだけ氣味だつたが、でもまあ工事は進捗した。二人とも無言で、暫時コック／＼やつて居たが、ハックは鏝すまに身をもたらせて、額の玉の汗を袖で拭きながら

「此處を濟すませたら、次はどこを掘るのだい。」

「あの寡婦やめめの宅の裏の、カーデフ山にある老木のところをやろう。」

「よかろう。だが寡婦が寶をとつてしまいはしないか。あの人の地所だから。」

「あの人が取る！ 隠してある寶は見付けた人の所有もつだ。誰の地所だつて、そんな事に關係があるものか。」

ハックはそれで満足して、又やり出した。暫時して、ハックが再び、

「やれ／＼又場所がちがつたのだろう。御前如何どう思ふ。」

「實に奇妙だね。どうも解らない！ 時には魔使め

が邪魔をするといふから、そうなのかも知れない。  
い。」

「何だ。魔使女は晝間は無力ではないか。」

「それ其もさうだ。そこまで考へつかなかつた。」

あゝ解つた！ 實に僕等は馬鹿ではないか。そ

れ、枯枝の蔭が夜中に射すところを見付けて、

そこを掘らなければいけないのだつた。」

「では今迄やつたのは、骨折損の草臥儲けか。而

して、こんどは夜來るのかい。すいぶん此處ま

であるよ。御まへ夜出られるかい。」

「出られるとも。僕等今夜爲なくてはならない。

他人がこの穴を見ると、すぐ知つて自分で手を  
下すからね。」

「よし來た！では叢の中に道具を隠して置かう。」

その夜、小年等は約束の時間に、其場所へ來て、

小暗い處に坐を占めて時の來るのを待つて居た。

場所は淋しいし、時刻は言ひ傳へで恐ろしいとなつ

てゐる刻限であるから、目に見えぬものが、ざわつ

く木の葉の中で囁き、幽靈は暗い隅にひそまつて  
ゐるし、犬の遠吠が遠くから風につれて聞こえて  
來ると、鼻が小氣味わるい聲で其に應じてゐた。

子供等は、莊嚴の氣に打られて、話もろくにせず

に居た。やがて十二時の頃を見計らつて、蔭の射

す點に印をつけて掘りにかゝつた。何だかこんど

はうまく行きさうな心地で、乘氣になると、仕事

も涉がいつて、穴はだん／＼深くなつて來た。而

して嘴がカチリと物に當るたびに、心が動亂いて

は、失望を繰り返すのであつた。出るものは石塊

か木塊ばかりなので、とう／＼トムが、

「駄目だ又ちがつた。」

「だつて違ふわけがない。蔭を寸分違はずに標を  
付けたもの。」

「それはそうだが、他の事が悪るかつたのだ。」

「何が。」

「時刻はたゞ推量したのだらう。だから早すぎた

かおそ過ぎたか分らないよ。」

ハツクは思はず鎌を手離した。」

「あゝさうか。それが悪かつたのだな。では、此處は止めやうではないか。精密な時刻はとも解らないし、魔使女だの幽霊だのが、そこらに動きまはつてゐるこんな時刻に、實際恐ろしいもの。始終後ろに何か居るやうな氣がしてね。後ろを向かうと思つても、前にも何か居て隙をねらつて居るかと思ふと、其も出来ない。此處へ來てから身體中がウズ／＼するよ。」

「僕もさうだ。泥棒は寶を埋める時には、樹の下へ死人を入れるのだよ、番をさせる爲に。」

「あゝ厭だ。」

「眞實ほんとなのだ。よく人がさう言ふもの。」

「死人の居る處なんぞ尙更だ。おれはこんな處にまご／＼して居たくない。必然きつと恐ろしい目に逢ふ。」

「僕も、死人を動かしたりしたくない。此處に居る死人が首を持上げて、何か言つたら如何だろ

う。」

「あゝ厭だトム。恐いや。」

「全くだ。氣持がよくないな。」

「此處を止めて、何處か他にしやうではないか。」

「あゝ、其方がよからう。」

「何處にしやう。」

トムは一寸考へて、

「化物屋敷にしやう。」

「やれ／＼。化物屋敷は厭だナ。死人よりも尙厭ではないか。死人も、口をさくかも知れないが、

白い經帷子かたびらを着て、人の氣の付かぬ間に傍へ寄つて來て、肩越しに首を突き出して、齒軋りなんかしやしない。そんな目に逢つたら堪らないからね——誰だつて。」

「あゝ、けれど幽霊は夜でなければ出ないのだよ。

晝間僕等が來て掘つたつて、邪魔をしやしないよ。」

「それはそうだが、晝間だつて夜だつて、あの家

の近くへ誰も行くものはない。御前もよく知つて居るだろう。」

「それは、人殺しのあつた場所へ行くのが厭だから人が行かないのだ。あの家に何か出るといふのは、夜だけで、しかも青く光るものが窓の所をすつと通るといふので、眞の幽霊ではない。」

「青い光りがピカ／＼するつていふのは、近くに幽霊が居るといふ事ではないか。幽霊でなくて、そんな光りを使ふものはない。」

「そうだね。だが何しろ、日の中は來ないのだから恐がる事はいらぬではないか。」

「よし。ではあの化物屋敷をする事にしやう。」  
丘を下りかけて見ると、眼下に平地の中央に、その化物屋敷が月光を浴びて立つて居た。一軒の離れ家なのだが、塀もいつか取り崩され、生ひ茂つた草は入口までも塞ぎ、煙突は破れ、窓の枠は無くなり、屋根の一端は落ち込んで居た。小年等はその窓の傍を、青い光りがフ／＼して居るかと思

つて、少時眺めた末、時と場合に相當した小聲で話しながら、右へぐつと遠まはりをして化物屋敷をよけて家へ歸つた。

翌日正午頃に、トムとハックは枯木の處へ道具を取りに來た、トムは直にも化物屋敷の傍へ行かうと焦つた。ハックも氣は急いだ、不意に、

「あのね、トム、今日は何曜日だか知つてゐるかい。」

トムは、心の中で曜日を順に繰つて見て、驚きの眼を上げた。

「あゝ、ちつとも考へ付かなかつた。」

「おれもさ。それが今不圖金曜日だといふ事が浮んだんだ。」

「ハック！用心に越した事はない。こんな事を金曜日により出して、どんな恐い事になるかも知れないからな。」

「かも知れない處か、なるさ。日には吉日といふ日もあるだろうが、金曜日は吉日ではない。」



「どんな馬鹿だつてそれ位知つて居る。君が始めて考へ付いたんでもあるまい。」

「何時おれが考へ始めたといつたい！それに金曜日だつていふばかりではない。昨夜、厭な夢を見たんだ——鼠の夢を。」

「そうかい。それこそ凶事の前兆だ。鼠が喧嘩したかい。」

「否」

「そんなら宜い。喧嘩しなけりや、凶い事が身に近いといふ前兆なのだからよく目を配つて用心すれば宜いのだ。今日は之を止めて遊ばう。ロビン・フードツていふ人を知つて居るかい、君。」

「如何いふ人だい。」

「英國中で一等偉い人——一等善い人だ。泥棒だよ。」

「おれも成りたいな。誰を掠めたのだい。」

「奉行だの、大僧正だの、大金持だの、王様だの貧乏人はちつとも虐めないで、可愛いがつてね

公平に分捕物を頒けてやつたんだ。」

「ふうん。素敵に偉いんだな。」

「そうとも、あんな豪傑はありはしない。今は、もうあんな人はないよ。ロビン・フードはね、片手を後ろに縛られて居ても、どんな相手でも負かすのだよ。而してね水松の弓で十錢銀貨を一哩半も隔て、射貫くんだ仕損ひなしで。」

「水松の弓つて何だい。」

「知らないけれど、何れどうかいふ弓さ。その銀貨の片端にしか當らないと、口惜しがつて、泣いて呪つたりするのだとさ。ロビンをして遊ばう——面白いよ、君に教へるから。」

「承知だ。」

それで二人は、長の午後をロビン・フードをして遊んだが、時々化物屋敷の方に懐かしさうに目をくられて、明日の見込みを話しがはして、日が西に傾く頃に、長い樹の蔭を横切つて家に戻つた。

土曜日には、晝後早々二人でまた枯樹の許へ來

て、木蔭で一服して、一饒舌して、其から掘かけの穴を少し掘り足した。當があるわけでもなかつたが、時には、もう六寸位で實に達くといふ際まで掘つて來ながら、そこで止めた爲に、他人に一掘りで掘り當てられる事もあると、トムが言つたからであつた。併し格別の事もないので、二人は道具を肩にし、心の中には、寶探しに必要な條件を悉く充して少しも疎略にした點はないとの自信を以て、立ち去つた。

化物屋敷に着いては見たが、カン／＼照り付ける日を受けて、物の音一つせぬ寂莫さといひ、淋しく荒れ果てゝゐる工合といひ、何だか不氣味で滅入るやうな心持がするので、さすがの二人も中へ入るのが恐ろしかつた。戸口へそつと摩り寄つて、恐る／＼覗いて見ると、室内は床板もなく雜草が生ひ茂つてゐて、壁はなく、只、古風な爐に戸のない窓、破れかゝりの階段があるばかりなのに此處にもかしこにも蜘蛛の巢の、破れたのがぶ

ら下つてゐた。二人は胸をどき／＼させ、ひそ／＼囁きながら、少しの音も聞き漏らすまいと耳を引立て直ぐ逃げられるやうに手足に少しの油断もなくして中へ入つた。

やがて、少しは馴れて、怖氣も薄らいだので、二人は精細に室内を見廻して、自分達の大膽を感心したり、又不思議がつたりして居た。次には二階へ上つて見たくなつたが、退去の時に險呑なので躊躇してゐた。その内に、恐いの恐くないの互に言ひ募つた結果、二人とも道具を隅に投げ捨て、上へ登つた。此處も又荒れ朽ちてゐる事は同じで、頼みありげの押入が一つ片隅にあるばかり。之も明けて見れば、大當て外れで、中には何もなかつた。二人はいよ／＼勇氣が出て、いざ下りて仕事に取り掛ろうといふ段になつて、トムが

「シッ！」

「何だい。」とハックは眞青になつていふ。

「シッ！それあの音！」

「あゝ、大變だ、逃げやう。」

「静に！ 動いちやいけない！ 戸口の方へ來た。」

二人は床に腹這になつて、床板の節穴ふしに目を當て、恐れ怪みつゝ待つて居た。」

「立ち留つたよ。いやちがふ。ヤ、こつちへ來る。」

來たゝゝ。何にも言つてはいけない。こんな處へ來なければよかつた……」

二人男が入つて來た。

……

此二人の男は、殺人でも強盜でもなんでもする悪漢なのであるが、二人の小年が隠れて居るとも知らずいろゝ悪事の相談をした末、此處を立ち

## 梅雨期と子供の衛生

醫學士 石 塚 保 吉

梅雨期は、非常に病氣の多い時です。殊に傳染病が多いやうです。原因は、黴菌の繁殖に最都合

去るについて、貯への金の囊を、爐邊の石をのけて深く埋める積りで、石を除けると、その下から函が出て中に數千弗の金が入つて居た。悪漢等はふと柔かな泥のついた鶴嘴と鏟とが隅に置いてあるのに氣が付いて、大に怪しみ、こゝに大金を殘して置く事を危く思つて、とうゝ其函を自分らの隠れ家へ持ち去つてしまつた。トムとハックは折角の好運を、道具のおかげでとり逃して、殘念がつてすごゝ歸へつていつた。

(トムの悪戯物語はまだ先か澤山ありますが此處では之で一段としてまた趣のかはつたものに移ります。)

のよい時期であるのと、今一つは、はげしい氣候の變化にあるのです。特に此の時期は、子供が病